「トリバディズム」再考

――フランス語フランス文学における女性同性愛の表象について――

長　澤　法　幸

はじめに

海外の性愛文学を数多く扱っていた、今はなき富士見ロマン文庫から出版された訳書『ガミアニ』を読んだ後にフランス語の原文に触れてみると、読者は開始数頁で首を捻ることになるだろう。問題の訳文は以下の通りである。

ヤレヤレ、もったいないはなしさ！　あのべっぴんがレスビアンなんだからな[(1)]！

上の引用は、作品の最冒頭で、美貌と財産に恵まれながらも、独身を貫き、「フェドラ[(2)]」と呼ばれたガミアニ夫人について、ある老好色家が零した一言であるが、原文では以下のようになる。

Bah ! C’est une tribade[(3)].

見ての通り、「レスビアン」と訳出された部分に当たるのは tribade の語である。あまり見慣れない単語であるが、十九世紀に至るまで、女性の同性愛者を表す語は専らこの tribade であったといわれている[(4)]。本稿では、辞書や文学作品を検討しつつ、この tribade の語義の変遷をみてゆきたい。

Lesbien とは何なのか

「レスビアン（レズビアン）*lesbien*」は、現代語では女性の同性愛者を意味するが、本来は「レスボス島 *Lesbos* の住人」という意味があるに過ぎなかった。この語が件の意味を持つのは、周知の通り、女性に対する愛情をうたったことで知られる古代の女性詩人サッフォーがこのレスボス島で活躍していたことに由来するものである。このレスボス島はサッフォーの在世当時より風光明媚な場所で、産するワインや大理石の質の高さ、土地の豊かさで有名であった[(5)]。現代におい

ても世界有数の観光名所としても知られているほか、同性愛者にとっては聖地のように扱われている[(6)]。ベル・エポック期にはルネ・ヴィヴィアンとナタリー・バーニーが連れ立ってこの島に降り立ち、サッフォーに倣って、女性だけの文学的、芸術的コミュニティを創設しようと意図したが、失敗に終わっている。今世紀初頭の島民による名称裁判、つまり「レズビアン」の語を女性同性愛の意味で用いることが名誉侵害であるという島民の主張を受けて同性愛者団体を訴える裁判が行われ、棄却されたことは記憶に新しいのではないだろうか[(7)]。

『アカデミー・フランセーズ辞典』に lesbien の語が初めて記載されたのは最近の版である第九版（1992 年）のことで、「（形）レスボス島にかかわる。（名）レスボス方言。古代レスボス島で話されたアイオリス方言 *Adj. Relatif à l'île de Lesbos. Subst. Le lesbien, dialecte éolien parlé à Lesbos dans l'Antiquité*」という地理的な記述と、「レスボス詩人サッフォーとその仲間たちの習慣からの連想で、女を愛する女 *Par allusion aux mœurs de Sapho, poétesse de Lesbos, et de ses compagnes, femme aimant les femmes*」という性的指向にかかわる記述が並置されている。アカデミー第八版（1932-5 年）以前の版や、リトレの辞典（1869 年）にはこの語は見られず、『十九世紀ラルース』（1866-76 年）にはかろうじて lesbien の項はあるものの、「レスボス島民」としての記述があるのみである。サッフォーや、レスボスの語と、女性同性愛の概念は、確かに結び付けられてはいたものの、公的には記述されてこなかったといっていいだろう。ミリアム・ロビックは、十九世紀後半までレスボスと女性同性愛が結び付けられるのが避けられた理由を、ピエール・ベイルの『歴史批評辞典 *Dictionnaire historique et critique*』（1696 年）における記述に求めているが[(8)]、これはあまり的確な指摘ではないかもしれない。その記述は以下の通りである。

> あまりにおぞましいためにフランス語では説明できないような発明が「レスボス民（レズビアン）」[aux Lesbiens] に帰せられている。私には、この下劣行為をフランス語で示すだけでなく、それを説明するために厳粛な作家が作中で用いた幾らかのことをラテン語で引用することをも憚られる。しかしながら、かの偉大なエラスムスが、以下に挙げるものを、その格言集から除外しなければならないと思っていなかった以上、私が彼の研究からいくつかを引用しても許されるはずであろう[(9)]。（下線、強調は論者による。以下同様）

上の引用の記述はかなり強い語調で書かれているといっていいであろうが、ベイルがここで述べている「あまりにおぞましい発明」とは、女性の同性愛を指すわけではない。上でも示したように、そもそも「レスボス民」の部分が *Lesbiens* と男性複数形で書かれており、女性だけの空間で起きる現象を示しえないのである。ベイルは続けて、エラスムス『格言集 *Adagia*』（1508 年）の一節を引用しているが、この記述からも、この「あまりにおぞましい発明」の内容が理解できるはずである。

口を使ってなされる、フェラチオとか、私はイラマチオもだと思うのだが、そうした恥ずべきことは、まずレスボス島で創始され、完成したのだといわれる。そして、それを最初に実施したのは女性であろう[10]。

以上はベイルによって引用された部分であるが、先述の通り、初出はエラスムスの『格言集』であり、この項はギリシア語の動詞「レスビアゼイン Λεσβιάζειν」［レスボスのやり方ですること］の語義を説明する個所である。エラスムスはこの語義を解説するにあたって、喜劇作家アリストファネス（前 446- 前 385）の作品を引用しつつ、「私が間違っていなければ、このギリシア語はラテン語の『吸う』に相当する *Id, ni fallor, tale quiddam est Graecis quale fellare Latinis*」と結論付けている[11]。ベイルの記述もその域を出てはおらず、この記述においてレスボス民と性的な放縦が結び付けられるときは、偏にオーラルセックスのことを指すのであり、女性同士の接触は必ずしも想定されていないのである。

しかしながら、オウィディウスの「罪なくしては百人の女を愛さなかった」、異性愛に改宗する前は少女を愛していたサッフォー像をはじめとして、文学作品においては度々サッフォーやレスボスの名と、女性の同性愛が結び付けられる事例がある。その最も衝撃的な例がボードレール『悪の花』におけるサッフォーであり、これが「レズビアン」という言葉が近代語において同性愛者の女性を意味するようになったきっかけとなったことは半ば自明視されている。

『悪の花』第一版が出版されるはるか以前に、ブラントームの『好色女傑伝 *Les Dames Galantes*』（1666[12]）の中に、サッフォーと女性同性愛を結びつける記述がみられる。

私がここで提する、お互いに恋した二人の女性が、古今にみられるように、一緒に寝て、（かのレスボスの閨秀サッフォーをまねて）いわゆる「女同士で」するとき、二人は不貞を犯し、それぞれの夫をコキュ（寝取られ）にしたといえるのか、という問題は、たぶん誰にも研究されてこなかったし、夢にも思われなかったかもしれない[13]。

レスボスのサッフォーはこのやり方の非常な大家であり、彼女がこれを開発して以来、レスボスの女性たちはこれを今日まで模倣し続けているという。［中略］こうした実践を好み、男性を許さず、男のように女性に専念する女性は「トリバード」と呼ばれる。ギリシア語からの派生で、ギリシア人によると τρίβω, τρίβειν［ギリシア語］、すなわち fricare［ラテン語］, freyer, friquer, s'entrefrotter［フランス語］を意味する。トリバードはフランス語では「フリカトリス *fricatrice*」といい、今日にもまだ見られるように、「女同士」で「擦る」人のことを言うのである[14]。

『好色女傑伝』は十六世紀上流社会の情事を軽快な筆致で描いた作品であるが、この記述からは、性におおらかであった当時の上層階級では女性の同性愛をも実践されていたこと、十六世紀当時、サッフォーやレスボスの語が女性同性愛のコノテーションでありえたことが読み取れる。さらに、次章で詳しく検討する tribade の語が、後述するどの公的な辞書よりも詳しく、具体的に記述さ

れているのが興味深い。加えて、tribade の語を更に fricatrice という語で受けなおし、その行為を fricarelle という女性名詞で表現している。

ただし、女性同性愛にかかわるブラントームの記述は、上掲の引用からもわかるように、夫に対する不義に当たるかという問いを起点に、それに終始していること、そして以下のように女性同士の交わりをあくまで前戯的なものとしてしか扱っていないことからも、現代ジェンダーの議論においては批判的にみられなければならないであろう。さらに、前戯としての論旨にもサッフォーが例として挙げられているのは注目すべきである。

> 私はこうしたレズビエンヌを見てきたが、擦ったり、擦り合ったりするすべての女性が、男性のもとに行かずにはいられないのである！　その大家であるサッフォーでさえ、偉大なるファオーンに惚れて、それで死んだではないか？　というのも、女性たちの語るところによると、結局は男しかないのであり、彼女たちがほかの女性とやるすべてのことは、男日照りを潤すためのものに過ぎない。擦り合いは、男性不足のためにしか役立たないのである[15]。

この記述について一つ付け加えるべきことは、「レズビエンヌ」と訳した部分が、原文で *Lesbiennes* と書かれていることである。これは大文字で書かれていることから固有名詞として扱われているが、明らかに「島民」という意味ではなく、女性同性愛者を意味している。lesbien が小文字始まりの一般名詞として定着するのにはもう少し時間がかかるが、ブラントームの記述にその定着の萌芽を見出だせるということはできるのではないだろうか。

マルキ・ド・サド『アリーヌとヴァルクール *Aline et Valcour*』（1795 年）にも、比喩としてサッフォーが記述されていることは指摘されてよい。さらに、サドの場合は「サッフィズム *saphisme*」の語の出現に先駆けて「サフォティズム *saphotisme*」という新語を導入しているのが他にはない特徴であるといえる。

> この倒錯に誠実な名をつける慣習はない。ふしだらな生活を送る女たちがそれにつける名は悍ましい。なぜならばご存じの通り、サッフォーはその詩によってよりも、この手の放蕩行為によってその名を永遠のものとしたのだから。どうして、この女たちの放蕩の奇癖に「サフォティズム」と名付けることに合意できないだろうか？[16]

この「サフォティズム」はサドの造語であり、『アリーヌとヴァルクール』以前に書かれた『ソドムの百二十日 *Les Cent Vignt Journées de Sodome*』（1785 年）にはこの行為名詞の動詞形が現れる[17]。

> 彼は目の前で二人の少女に愛撫をさせ、二人が「サフォティゼし合い *se saphotiser*」続けている間、後背位で代わる代わる犯した[18]。

サドの記述には saphotisme の語が散見されるが、いずれも具体的な描写を欠いているため、性に関わることと、女性同士でなされていること以外にははっきりとしたことは判然としない。しかし、サド独自の造語ではありながら、作中では人口に膾炙した悪徳行為であるかのように書かれている。

> ミングレル人やグルジア人の間では、近親姦、強姦、嬰児殺し、売春、不貞、殺人、窃盗、ソドミー、サフォティズム、獣姦、放火、毒殺、誘拐、尊属殺、これらのことは徳高き行いとされ、称賛される[19]。

上記は『悪徳の栄え』（1799 年）からの引用であるが、これはサドの議論の中でしばしば見られる、フランスでは犯罪とされていることが異国では高く評価されることがある、すなわち、行為自体は善でも悪でもなく中立を保っているということを極端な例で示す、誇張表現である。サドの作品の登場人物は、上記のように名詞を列挙しながら議論をしたがる傾向があるが、この「サフォティズム」の語は、必ずソドミーの対として挙げられている。要点をまとめると、saphotisme は男のソドミーの女版として対置されるものであり、現行の saphisme の語と比べて単に行為を表すのではなく、反宗教的なニュアンスを含意しているといえるのである。

さて、サッフォー、レスボスの語についてはこのくらいにして、次章では tribade の意味について本格的に検討してゆきたい。

tribade とは何なのか

現行のフランス語辞典で tribade の語を引いてみると、多くは「同性愛の女 *femme homosexuelle*, =*lesbienne*」といった極めて簡略な説明があるに過ぎない。現代のフランス人にとって、この語は半ば死語と化しており、歴史や文学の素養がある限られた者以外は知ることがない一種の専門用語と見なされているようである。フランス（語）で tribade の語が女性の同性愛と結びつけられたのはルネサンス期においてのことであり、その初出は人文主義者アンリ・エチエンヌの記述に遡る[20]。アンリ・エチエンヌはその著作『ヘロドトス弁護 *L'Apologie pour Hérodote*』（1566）において、第十三章を「自然に反する罪 péché contre la nature」について論じることに割いているが、その中で「恐ろしく奇妙な大罪」として獣姦の事例を紹介したのち、続けて、ある少女の例を引用している。

> ブロワとロモランタンの間に位置するフォンテーヌ出身のある少女が、男に扮して、フォワの市街地

の宿屋で約 7 年間、家畜の飼育係として働いていたが、後にその土地のある少女と結婚し、ぶどう農に従事する生活が約 2 年間続いた。その後、夫のつとめを偽装した咎が発覚し、彼女は捕えられ、告解の後に生きたまま火刑に処された。過去のあらゆる悪徳に比しても、これが彼女に特有で独特のものであることを、我々は称えられるかもしれない。なぜなら、この行為は、古くはトリバードと呼ばれた幾人もの悪女のそれと何も共通するものがないのである [21]。

以上が、フランス語において初めて tribade の語が使われた箇所の全文である。マリアンヌ・レゴーも指摘する通り [22]、アンリ・エチエンヌの記述には具体的な性描写が欠けているため、ここに登場する少女に淫猥な印象はない。この少女の罪は、ひとえに男装をしたことと、家長を装ったことであり、生きたまま火に焼かれるという、現代の感覚からするとあまりに過酷な罰を受けているといえる。このことは、同性間性交渉に法的な罰則を設けていなかった十九世紀フランスにおいて、女性の異性装に厳しい規制がかけられていたことを彷彿とさせるが [23]、これらの処置はいずれも、女性に対する男性の優位という社会秩序が転覆することを恐れてのことだと容易に想像がつく。アンリ・エチエンヌは、女性の異性装、並びに女性が男性であると偽って社会生活を送ることをこれまでの「トリバード」にはない、まったく新しい悪徳だとして称えるべきだと皮肉を言っているが、この記述は裏を返せば、著者の頭の中で別の悪徳が想定されているということである。では、その悪徳とはいかに記述されるものなのであろうか。それを解明するには、少なくとも tribade に相当するラテン語が登場するテクストを検討してみる必要がある。

ブラントームの記述にもあったように、tribade の語はギリシア語で「擦る」を意味する動詞 τρίβω, τρίβειν を語源とするもので、ラテン語では「トリバス tribas」と記述されている。紀元一世紀のローマの詩人マルティアリスは『警句集 *Epigrammata*』第 7 巻で、性の指南書の著者として信じられていた古代の遊女フィラエニスを「トリバス」であるとして嘲弄する詩を二つ残している。それは警句 67 番と 70 番であるが、まずは 70 番の方から引用しよう。

警句 70
あんたこそ、トリバスの中のトリバス、フィラエニス。
やった女をツレと呼ぶなんざ [24]。

ここで「ツレ」と訳したラテン語 *amica* は、これを直接の祖語とするフランス語の *amie* のように「女友達 *amie*」と「情婦 *maîtresse*」を同時に意味しうるものであり、この詩においては一種の言語遊戯的な試みがなされているという [25]。「やった」にあたる *futuis* が、肉体的に交接することを極めて明確に意味する動詞であることからも、ここで描かれる「トリバス」ことフィラエニスと、別の女性との間に性的な接触があることは間違いない。しかしながら、警句 67 を読んでみると、「トリバス」と称される必要条件は女性との性交渉だけでは満たせないことがわかる。少々長いが、以下に引用しよう。

警句 67

名代のトリバス、フィラエニスは、お稚児のおカマを掘る他に / 旦那のアレよりおっ立てて / 参らす女子(おなご)は日に十一。/ 裾を捲って球技して / ガキには重いダンベルを / 真っ黄に汚れ、ブンまわす。/ 土俵で泥に塗れたら / 師範の鞭を身に受ける。/ 酒をしこたま吐くまでは / 飯も食わなきゃ寝もしない。/ 肉十六個で精つけりゃ / またも吐くまで飲めるはず。/ すべてが済めば、お楽しみ /「男にあらず」と咥えずに / 女子のあいだをくっちまう。/ 神よ、正しき心を寄越せ / 舐陰を武道と思う女に [26]。

この警句の原文は十七行からなる定型詩の形をとっているが、ここでは / によって行の区切りを示すにとどめた。また、訳について補足すべきことのうち、本稿の論旨に直接関わらないことについては注に記したので、適宜参照されたい [27]。この詩は、大きく①フィラエニスの紹介（ℓ1-3)、②その生活（ℓ4-15)、③神への呼びかけ（まとめ）（ℓ16, 17)、の三部に分けることができるだろう。少女との性交が描かれるのは三行目と十五行目であり、それぞれ *dolat*（打ち負かす、やっつける)、*uorat*（がつがつと貪り食う）という極めて攻撃的、かつ能動的な動詞が使われている。

先行研究においては、この警句は上記の女性同性愛的な部分が専ら強調され、引用されてきた傾向があるが、看過できない記述はそれとは別のところにあるように思われる。まず、一行目に早々にあらわれているように、フィラエニスは少年とも性行為をしている。ここで使われている動詞 *pedicat* は「アナルセックスをする」という意味であるが、その音声からも類推できるように、ギリシア語の「少年愛(パイデラスティアー) παιδεραστία」と関係のある語である [28]。この構図はギリシアの少年愛を容易に連想させるものであり、四行目以降でフィラエニスの「男のような女」としての側面が詳述されることの伏線にもなっているといえる。事実、球技遊びに興じ（四行目)、亜鈴を振り回し（六行目)、強壮食を大量に食べる（十三行目）姿は、古典的な女性像の典型からはかけ離れたものであり、さらに、閨房でフェラチオをしないことを、本人自ら「男らしいことでない *putat hoc parum uirile*」からだと断じているのである。フィラエニスが女性と情交を演じるのは、純粋に女性としてではなく、彼女の中の男性的な部分がそれを演じているのだといえ、これはルキアノス『遊女の対話 Εταιρικοί Διάλογοι/*Dialogi meretricii*』において「ぼくは、君［遊女レアイナ Λέαινα のこと］や他の女の人たちのように生まれたけれど、考えや欲望、その他すべてのことは男なんだ [29]」と語り、「メギロス Μέγιλλος」と自称するレスボスの女性、メギラ Μέγιλλα を思わせる描写である。現代の尺度でいえば、それは女性として出生した性別違和の人物が、男性として女性と交接しているということになり、もはや「同性愛」と称されるものですらない。

『アカデミー・フランセーズ辞典』(1694-1992) に tribade の語が記述されるのは第 4 版（1762）以降であり、その意味も、「女に狼藉をはたらく女 *Femme qui abuse d'une autre femme*.」(4e, 1762, p. 877)、「女に狼藉をはたらく女。一般にこの語は避けられる *Femme qui abuse d'une autre femme. On évite ce mot*.」(5e, 1798, p. 693)、「他の女と性器を乱用する女。この語の使用は一般には憚られる *Femme qui abuse de son sexe avec une autre femme. On évite d'employer ce mot*.」(6e, 1832-5,Tome 2, p.

882)、「自然に反する趣味と習慣のある女 *Femme qui a des goûts et des habitudes contre nature.*」(7e, 1878,Tome 2, p. 887)、「自然に反する趣味のある女 *Femme qui a des goûts contre nature.*」(8e, 1932-5,Tome 2, p. 687) というように徐々に意味が変遷してゆき、第九版(1992 年)では削除されている。まず特筆すべきは五、六版で追加された「忌み語」としての側面であろう。この語を避けるべきと記述しているものとしては他にリトレのものが挙げられ、そこでは「避けるべき用語。他の女と性器を乱用する女。*Terme qu'on évite d'employer. Femme qui abuse de son sexe avec une autre femme*[30]」とあり、アカデミー第六版とほとんど同じ記述であることがわかる。七、八版では、この忌み語は「自然に反する」という道徳律に関わる記述で説明される一方で、その内容の一切が不明となっており、タブーとしての側面が強くなっているといえるだろう。これに似た書き方をしているものとしては十八世紀の『百科全書 *Encyclopedie*』や、フュルチエールの辞書(1690 年)を元にトレヴーで編まれた『トレヴー辞典 *Dictionnaire de Trévoux*』(1704-71)が挙げられ、それぞれ「女に対して情熱を抱く女。男が男に熱を上げるのと同様に、わけのわからぬ独特な倒錯 *femme qui a de la passion pour une autre femme ; espece de dépravation particuliere aussi inexplicable que celle qui enflamme un homme pour un autre homme*[31]」や「女に対して情熱を抱く女。男が男に対して抱く情熱と同様に、わけのわからぬ趣味 *femme qui a de la passion pour une autre femme. Goût aussi inexplicable que la passion d'un homme pour un autre homme*[32]」といった記述があり、いずれも具体的な描写を欠いていることや、主観的表現(*dépravation, inexplicable*)があることがわかる。

これらの中で、アカデミー第五版から六版が最も変化の大きなものではないかと論者には思われる。なぜならば、五版までは「狼藉」の対象でしかなかった目的語の *femme* が、六版では主格の *femme* の性器を共に「乱用」する存在となっており、共犯関係が生まれているからである。マルティアリスやアンリ・エチエンヌの例でも見てきたように、近代以前の tribade は、相手に攻め入る、男のような女であり、その対象となる女性は議論の外に置かれていた。一見すると劇的な変化である七版以降の「自然に反する趣味(ないしは習慣)」という記述はこの共犯関係に由来する相互的な愉しみのことに他ならず、ここで想定される「受け手」の *femme* もまた tribade であるといえるのである。

『十九世紀ラルース』における記述

こうした変遷をみてゆくと、tribade は第一に「男のような女」であり、女性との接触はその男性性を説明する手段にすぎなかったのが、徐々に男性的であるという意味が薄れ、むしろ女性同士の交接に焦点があうようになってきた、ということができそうである。しかしながら、『十九世紀ラルース』における tribade の説明はこれまでに見てきた辞書とは一線を画している。

Tribade : クリトリスが異常に肥大化し、その性器を乱用する女性 [33]。

この説明においては、身体の病理学的変化と、性的な亢進状態が記述されているのみで、もはや女性の同性愛の問題ですらなくなっているように見える。

しかしながら、tribade とクリトリスの問題については、十七世紀にはすでに関連付けられて論じられてきた。その初出はトーマス・バルトリンによる『解剖学講義 *Institutions anatomiques*』（1647 年）である。すでに幾度となく引用されてきた文献であるが [34]、改めてここでも確認しておきたい。

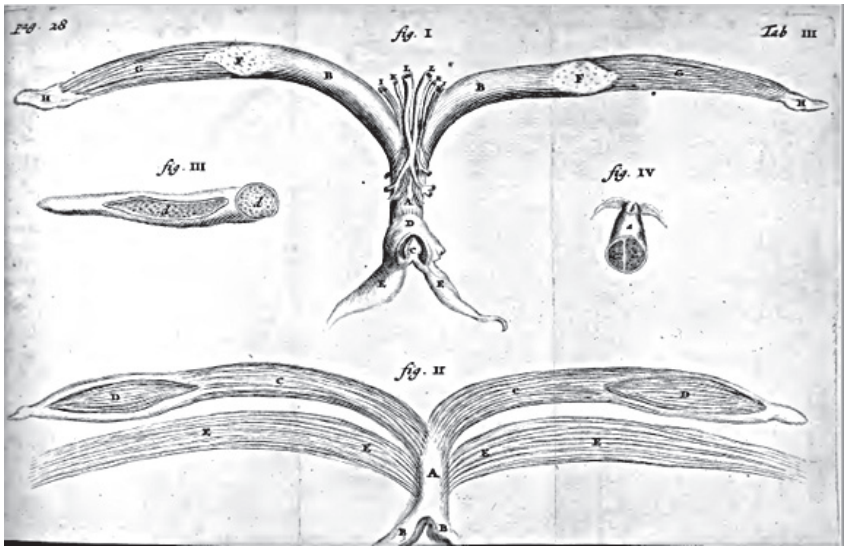
> ギリシア人はこの器官を「クリトリス」と名付け、ローマ人は *Tentigo Landie* とした。またその他に、陰茎や、女の男根と言った者もあった。なぜなら、これは位置、性質、構造の点で、また、充血質で、勃起し、亀頭や包皮のようなものがある点で男性器に似ており、男根並みの大きさのクリトリスを持ち、男根の替わりにそれを乱用し、互いに睦み合う女性がいると考えたからである。そういう女性を、ギリシア人は「トリバード」といった。（某フィラエニスが、このソドミーの類のものの創始者で、女流詩人サッフォーもまた多用していたことを書き留めておこう）[35]。

バルトリンはクリトリスと陰茎の外形的な類似を述べているが、これらは厳密には相補する器官ではない。クリトリスの構造については、ほぼ同時代のデ・グラーフ Regnier de Graaf の『女性の生殖器官について *De Mulierum Organis Generationi Inservientibus*』（1672 年）における記述によって克明に明らかにされている。［図 1］は、同書に掲載されているクリトリスの解剖図と各部位の説明である。すでに現代水準に比肩するほどの正確な記述があったにもかかわらず、クリトリスの構造についての正しい知識が人々に共有されることはなかった。二十世紀後半に入って初めて、この器官についての正確な知識が再確認されたのである [36]。『ヴァギナ — 女性器の文化史』の著者キャサリン・ブラックリッジによると、クリトリスについて沈黙が保たれたのは社会道徳上の問題があったからだという。古代以来、女性が妊娠するためには性交の最中にオーガズムに達する必要があると考えられており、性感を高める機能があるクリトリスは不可欠な器官とされていたが、十八世紀以降、妊娠とオーガズムとの間に因果関係がないことがわかってくると、生殖に関わらない女性の快楽、並びにそれを象徴する存在であるクリトリスは教会権力からの迫害の対象となり、次第に忘れられてゆき、解剖学の教科書にも載らなくなったという [37]。

fig. I (正面から見た図)
A. クリトリス
BB. クリトリスの脚部
C. クリトリスの陰部
D. クリトリスの包皮
EE. 小陰唇
FF. クリトリスの脚部が恥骨の下部に結び付けられる骨膜の部分
GG. クリトリスの筋肉
HH. 筋肉のうち、座骨か尻の方に入り込んでいる部分
II. 神経
KK. 動脈
LL. 血管
は外陰部の突出した全部に向かっている

fig. II (裏側から見た図)
A. クリトリス
BB. 小陰唇の裏側
CC. クリトリスの脚部を走る筋肉
DD. 膣を構成する同種の筋繊維
EE. クリトリスの神経と連結する括約筋の繊維

fig. III et IV(別のやり方で切開した図)
a. クリトリス
b. クリトリス頂部と包皮
cc. クリトリスの海綿組織のうち、中隔から切り離された部分
dd. 中隔がないところで切り離された脚部の海綿組織



［図 1 [38]］

クリトリスが矮小化された女性の陰茎であるという幻想が伝播していたことは、サドの作品に見られる幾分戯画化された登場人物の存在からもわかる。

『知ってる？』サン・テルムがそう言いました。『ヴォルマールが男だって。彼女はクリトリスが３プース［≒8cm］もあって、自然を侮辱することを運命づけられていて、相手の性別が何であれ、この淫売はトリバードとお稚児を順繰りに演じねばならず、中庸なんぞご存じないのよ [39]』

『十九世紀ラルース』が tribade の項を性器と精神の疾患をもってしか説明しなかったのは、女性の同性愛という反自然の象徴的なものがブルジョワ社会に混乱をもたらすことを案じてのことであった [40]。この記述が不十分であることは、これまでに引用した資料からも明らかであるが、最後に名代の「トリバード」であるガミアニ夫人の様態を一つ引用しよう。

女中のジュリーが、熱々の牛乳を満たし、随意のままに十歩先までそれを噴き出すことができる巨大

な張形を装備して現れた時の夫人の絶叫、悲嘆と苦悩の真なる叫びを僕は理解できなかった[41]。

「張形 *godemiché*」とは男性器を模造した道具のことで、熱した牛乳の噴射は、いうまでもなく射精を擬したものである。その後ガミアニ夫人は張形の受け手となるのであるが、このことは以下の二つの点で重要であるといえる。一つは、トリバードの快楽は、『十九世紀ラルース』にあるようなクリトリスに限定されたものでも、その語源となった摩擦に限定されたものでもなく、膣内での射精にも伴うものであるという点である。さらに重要なのは、ガミアニ夫人にあっては、マルティアリスが描いたフィラエニスや、アンリ・エチエンヌの引用における少女のように男性的精神や男装を伴うことなく、また、陰茎のように肥大化したクリトリスを備えることもなく、「女性として」女性と性交渉をもっている点であろう。トリバードの、「男のような女」という側面は、男性的な能動性や暴力性を失うにつれて、薄れていったのである。

おわりに

本稿は、Tribade の語が平然と「レズビアン」と訳されている事例を見かけたことをきっかけに、これらの語が辞書でどのように記述されているかを遡り、文学作品における表象をわずかばかり分析することによって書かれた。その結果、「女性同性愛者」をあらわす唯一の単語であると考えられてきた tribade は、元々は「男のような女」「淫蕩な女」という意味を表すことから始まり、徐々に意味が変遷していった結果、最終的には「女として女に抱かれる女」をも含意するに至った。しかしながら、tribade はいずれも男性とも性的接触を持つことから、現代の lesbien に相当する語は近代以前のフランス語には存在しなかったという結論に達した。

ある概念を表す単語が存在しないということは、その言語において、当該の概念が存在しないということである。この問題が行き着く先は、「レズビアン *lesbien*（＝女性同性愛者＝女性だけを愛し、男性を愛さない女性）」という概念がいつ発生し、記述されるようになったかを解明することになる。引き続き文献を渉猟しながら、慎重に検証してゆきたい。

注

欧文の引用については論者による拙訳によるが、すでに邦訳、近代語訳があるものについては適宜参照した。

(1) ミュッセ、『ガミアニ』、須賀慣（鈴木豊）訳、富士見書房、1977 年、p. 13。

(2) バルザックの小説『あら皮 *La Peau de chagrin*』の登場人物の名で、「心のない女」の比喩。

(3) Musset, *Gamiani suivi de lettre à la présidente de Théophile Gautier*, « Collection Aphrodite classique », Eurédif, 1975, p. 13.

(4) Myliam Robic, « *Femme damnées* » *Saphisme et poésie (1846-1889)*, Classique Garnier, 2012, p. 79

(5) Bayle, « Lesbos » dans *Dictionnaire historique et critique*, Tome IX, Genève, Slatkine reprints, 1969, pp. 183-4

(6) 2015 年の EU 難民危機では、島民人口の約七倍の人数の難民が流入して観光業に大きな打撃を与えたといわれ、また、ゴミの不法投棄で景観が壊れつつあることが社会問題化している。また、同性愛のシンボルとして扱われることを苦々しく思っている島民も少なくない。

(7) APF, 2/5/2008, 23/7/2008.

(8) Robic, « *Femme damnées* » *op. cit*., p. 80.

(9) **<u>On attribue aux Lesbiens une invention si abominable que la langue française ne peut servir à l'exprimer</u>**. Non–seulement je ne désignerai pas en français cette vilenie, mais je m'abstiendrai même de rapporter en latin une partie des choses que des écrivains fort graves ont employées dans leurs livres pour l'expliquer. Mais puisque le grand Erasme n'a pas cru qu'il dût exclure du recueil de ses proverbes celui qui était venu de là, il me doit être permis de copier quelque chose de ses recherches. (Bayle, *op. cit*. p. 185)

(10) Aiunt turpitudinem, quae per os peragitur, fellationis opinor aut irrumationis, primum a Lesbiis autoribus fuisse profectam et apud illos primum omnium feminam tale quiddam passam esse. (cité par Bayle, dans *op. cit*., p. 185)

(11) Erasme, *Les Adages*, sous la diréction de Jean-Christophe Saladin, Société d'édition Les Belles Lettres, 2013, p. 348.

(12) ブラントーム Brantôme は 1540 年頃生まれ、没年は 1614 年であるが、生前は著作がまったく出版されなかった。死後オランダのライデンで初めて出版され、その時の書名は *Vies des dames galantes* であった。« Note bibliographique» dans *Les Dames Galantes* de Brantôme, sous Maurice Rat, Garnier Frères, p. xvii.

(13) Si feray-je encor cette question, et puis plus, qui, possible, n'a point esté recherchée de tout le monde, ny, possible, songée à sçavoir-mon si deux dames amoureuses l'une de l'autre, comme il s'est veu et se void souvent aujourd'huy, couchées ensemble, et faisant ce qu'on dit *donna con donna* (en imitant la docte Sapho lesbienne), peuvent commettre adultère, et entre elles faire leurs marys cocus. (Brantôme, *Les Dames*, *op. cit*., p. 119)

(14) On dit que Sapho de Lesbos a été une fort bonne maistresse en ce mestier, voire, dit-on, qu'elle l'a inventé, et que depuis les dames lesbiennes l'ont imitée en cela, et continué jusques aujourd'huy ; […] Et telles femmes qui ayment cet exercice ne voulent soufirir les hommes, mais s'adonnent à d'autres femmes, ainsi que les hommes mesmes, s'appellent *tribades*, mot grec dérivé, ainsi que j'ay appris des Grecs, de τρίβω, τρίβειν, qu'est autant à dire que fricare, freyer, ou friquer, ou s'entrefrotter; et tribades se disent *fricatrices*, en mestier de *donna con donna*, comme l'a trouvé ainsi aujourduy. (Brantôme, *ibid*., p. 120)

(15) Que j'en ay veu de ces Lesbiennes, qui, pour toutes leurs fricarelles et entre-frottemens, n'en laissent d'aller aux hommes ! Mesmes Sapho, qui en a esté la maistresse, ne 'se mit-elle pas à aymer son grand amy Faon, après lequel elle mouroit? Car, enfin, comme j'ay ouy raconter à plusieurs dames, il n'y a que les hommes ; et que de tout ce qu'elles prennent avec les autres femmes, ce ne sont que des tirouers pour s'aller paistre de gorges-chaudes avec les hommes ; et ces fricarelles ne leur servent qu'à faute des hommes. (Brantôme, *Ibid*., p. 123)

(16) On n'est point encore convenu d'un nom honnête pour cet égarement. Celui que les femmes de mauvaise vie lui donnent, est affreux, puisque *Sapho* s'immortalisa bien plus par ce désordre que par ses vers ; pourquoi

ne conviendrait-on pas de nommer **saphotisme** ce travers singulier du libertinage des femmes. (Sade, *Aline et Valcour*, *op. cit*., Tome I, Gallimard, 1998, p. 840)

(17) Sade, *Aline et Valcour*, *op. cit*., 1998, p. 1314.

(18) Il fait branler deux filles devant lui, et fout alternativement les branleuses en levrette pendant qu'elles continuent de **se saphotiser**. (Sade, *Les Cent Vignt Journées de Sodome* dans *Œuvres*, Tome I, Gallimard, 1998, p. 314)

(19) Chez eux[= Les Mingréliens et les Géorgiens], l'inceste, le viol, l'infanticide, la prostitution, l'adultère, le meurtre, le vol, la sodomie, le saphotisme, la bestialité, l'incendie, l'empoisonnement, le rapt, le parricide, sont des actions vertueuses et dont on se fait gloire. (Sade, *Histoire de Juliette* dans *Œuvres*, tome III, Gallimard, 1998, p. 347)

(20) Robic, « *Femme damnées* », *op. cit*., p. 79.

(21) C'est qu'une fille native de Fontaines, est entre Blois et Rommorantin, **s'estant desguisee en homme**, servit de valet d'estable environ sept ans en une hostelerie du faux-bourg du Foye, puis se maria à une fille du lieu, avec laquelle elle sut environ deux ans, exerceant le mestier de vigneron. Apres lequel temps estant descourverte la meschanceté de laquelle elle usoit pour **contrefaire l'office de mari**, fut prise, et ayant confessé fut là brulee toute vive. Voici comment nostre siecle se peut vanter qu'outre toutes les meschancetez des precedens il en ha qui luy sont propres et peculieres. Car cest acte n'ha rien de commun avec celuy de quelque vilaines qu'on appeloit anciennement **tribades**. (Henri Estienne, *L'introduction au traité de la conformité des merveilles anciennes avec les modernes ou, traité préparatif à l'Apologie pour Hérodote*, Tome I, édition critique par Bénédicte Boudou, Genève, Droz, 2007, pp. 279-80)

(22) Marianne Legault, *Female Intimacies in Seventeenth-Century French Literature*, Ashgate, 2012, p. 42.

(23) 1800 年公布の文書によると、セーヌ県においては、女性が男装する際には知事への届け出が義務付けられており、違反すると警視庁へ送検される決まりになっていた。Myliam Robic, « *Femme damnées* », *op. cit*., p. 91.

(24) LXX Ipsarum tribadum tribas, Philaeni, /Recte, quam futuis, uocas amicam. (Martial, Epigrammes, Tome I, texte établi et traduit par H. J. Izaac, Société d'édition « Les Belles Lettres», 1961, p. 231)

(25) « Appendice » dans *Ibid.*, p. 270.

(26) LXVII Pedicat pueros tribas Philaenis /Et tentigine saeuior mariti /Undenas dolat in die puellas. /Harpasto quoque subligata ludit, /Et flauescit haphe, grauesque draucis /Halteras facili rotat lacerto, /Et putri lutulenta de palaestra /Uncti verbere vapulat magistri: /Nec cenat prius aut recumbit ante, /Quam septem uomuit meros deunces; /Ad quos fas sibi tunc putat redire, /Cum coloephia sedecim comedit. /Post haec omnia cum libidinatur, /Non fellat - putat hoc parum uirile -, /Sed plane medias uorat puellas. /Di mentem tibi dent tuam, Philaeni, /Cunnum lingere quae putas uirile.(Martial, *ibid.*, p. 230)

(27) ℓ5「ガキ draucis」には同性愛の受け手の少年という意味がある。ℓ7「土俵 palaestra」は闘技場のこと。ℓ10「しこたま /[…] septem(7) […] deunces(11/12)」は既訳を参照したが（Budé 版では *sept sétiers*、藤井昇「三合」等）、正確にどれくらいの量なのかはわからなかった。ただし、量の多さを喚起していることは確かである。ℓ12「肉 coloephia」は、主にスポーツ従事者が食べる強壮食（現代のプロテインをイメージすればよいか）であるが、資料によってパンであったり肉であったりと、具体的な実像は今一つ掴み兼ねる。

(28) 動詞 *pedico* はギリシア語の παιδικός（「子供の」）を祖とする言葉であり、この語もまた παιδεραστία 同様、παῖς「子供」に由来する。

(29) ἀλλὰ ἐγεννήθην μὲν ὁμοίαταῖς ἄλλαις ὑμῖν, ἡ γνώμη δὲ καὶ ἡ ἐπιθυμία καὶ τἆλλα πάντα ἀνδρός ἐστί μοι (Lucien, « Εταιρικοί Διάλογοι » dans *Lucien*, tome VII, traduit par M.D. Macleod, London, Harvard University Press, 1969, p. 384)

(30) Littré, *Dictionnaire de la langue française: et supplément*, Tome 4, 1869, p. 2340

(31) Diderot, « Tribade » dans *Encyclopédie*, Tome 16, p. 617.

(32) *Dictionnaire universel françois et latin, vulgairement appelé Dictionnaire de Trévoux*, Tome 8, Compagnie des libraires associés, 1771, p. 181.

(33) Femme dont le clitoris a pris un développement exagéré et qui abuse de son sexe. (Lalousse, *Grand dictionnaire universel du XIX siècle*, Tome 15, p. 482)

(34) Marie-jo Bonnet, *Les Relations amoreuses entre les femmes XVIe-XXe siècle*, Catherline Blackledge, *THE STORY OF V—Opening Pandora's Box*（『ヴァギナ　女性器の文化史』藤田真利子訳、河出書房新社、2011 年）、Jelto Drenth, *The Origin of the World*（『ヴァギナの文化史』、塩崎香織訳、作品社、2005 年）など多数。

(35) Les grecs le nomment *Clitoris* les Latins, et les autres la verge, ou le membre de la femme, parce qu'il ressemble au membre viril en situation, en substance, en composition, en la repletion des esprits, et l'erection, and qu'il a quelque chose qui ressemble au gland and au prepuce, que parce qu'il croist en quelques-vnes de la grosseur du membre viril, de forte que quelques femmes abusent du Clitoris au lieu du membre viril, and s'accouplent ensemble, que les Grecs appellent *Tribades*. [On escrit qu'vne certaine Philaenis a esté la premiere inuestri, ce de cette sorte de sodomie, dont la poëtesse Sappho a aussi usé.] (Bartholin, « *Du clitoris* » dans *Institutions anatomiques*, traduit en français par Abr. du Prat, 1647, pp. 205-6)

(36) Marcia Douglass, Lisa Douglass, *Are We Having Fun Yet?: The Intelligent Woman's Guide to Sex*, Hyperion, 1997, p. 187

(37) 以上の議論は、キャサリン・ブラックリッジ、『ヴァギナ―女性器の文化史』、藤田真利子訳、河出書房新社、2005 年、pp. 216-225 による。

(38) Regneri de Graaf, *De mulierum organis generationi inservientibus tractatus novus*, Lugduni Batavorum[=Leiden], Officina Hackiana, 1672, pp. 27-8

(39) - Ne sais-tu pas, dit Sainte-Elme, que Volmar est un homme ? Elle a **un clitoris de trois pouces**, et, destinée à outrager la nature, quel que soit le sexe qu'elle adopte, il faut que la putain soit tout à tour tribade ou bougre ; elle n'y connaît pas de milieu. (Sade, *Juliette*, *op. cit*., Tome III, pp. 197-8)

(40) Robic, « *Femmes damnées* », *op. cit.*, p. 81.

(41) Je ne pouvais comprendre cette exclamation, véritable cri de détresse et d'angoisse, lorsque Julie reparut armée d'un énorme **godemiché** rempli d'un lait chaud qu'un ressort faisait à volonté jaillir à dix pas. (Musset, *Gamiani*, *op. cit*., p. 55)